

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



第35回ともしびポスターコンテストともしび大賞受賞作品

まえがき

福祉作文コンクールは昭和五十二年に始まりました。次世代を担う子どもたちが、福祉作文を通じて、「助け合い」や「思いやり」の心を育む機会となり、誰もがお互いを支え合う「ともに生きる福祉社会」の実現を目指す一助として行われてきました。

三十八回目を迎えた今年は、県内の小・中学校合わせて二百三十二校から九千四百一編の応募がありました。小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県審査会を経て、優秀賞十六編、準優秀賞二十編、佳作二十編を決定いたしました。

本作品集は、入選された五十六編の作品の中から優秀賞十六編を掲載してあります。どの作文も、自らの体験や経験を通じて感じたことや考えたことが自分自身の言葉で丁寧に書かれています。この作品集が大勢の皆さまの目に留まり、相手を思いやり、助け合い、支えようとする気持ちが社会全体に広がっていくことを期待しています。

本来ならば、入選者すべての作品をご紹介したいところですが、紙面の都合上、準優秀賞

及び佳作は入選作品の題名・学校名・氏名のみを掲載させていただきましたので、ご了承ください。

結びにあたりまして、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査していただきました委員の方々に、心よりお礼申し上げます。

また、ご協力いただいた神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、テレビ神奈川、神奈川新聞社、日揮社会福祉財団の皆さまに、深く感謝申し上げます。

平成二十七年一月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局 放送部部長	株式会社テレビ神奈川 営業本部 事業推進室長兼経営戦略室長	株式会社神奈川新聞社 クロスメディア営業局 企画編集部長	公益財団法人日揮社会福祉財団 常務理事兼事務局長	神奈川県保健福祉局福祉部 地域福祉課 課長	神奈川県立総合教育センター 教育人材育成課 指導主事	社会福祉法人神奈川県共同募金会 常務理事	社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 常務理事
広田俊明	嶋田充郎	瀧村誠	木高正志	西條由人	小林美奈子	八木明	矢野敏行

(順不同/敬称略)

第38回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

凱力は凱力

相模原市立中野小学校

五年 坂本 凱力……………1

神奈川県教育長賞

ぼくの弟と家族

小田原市立千代小学校

三年 朝倉 稜……………3

日本放送協会横浜放送局長賞

私を忘れた大ばあちゃん

大磯町立国府小学校

四年 二宮 珠生……………5

テレビ神奈川社長賞

安心・幸福

清泉小学校

五年 石本 和……………7

神奈川新聞社長賞

白いつえは命のつえ

清泉小学校

五年 鈴木 那奈…………… 9

ふれあい賞

おじいちゃんと青いトマト

松田町立松田小学校

六年 渡辺菜瑠真…………… 11

神奈川県共同募金会長賞

前を向いて生きる

秦野市立南が丘小学校

四年 石井 李咲…………… 13

神奈川県社会福祉協議会長賞

ボランティア体験

厚木市立毛利台小学校

六年 継 新命…………… 15

中学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

正しく理解し、伝えていくこと

聖和学院中学校

一年 川上 乃愛……………17

神奈川県教育長賞

妹への感謝の気持ち

三浦市立初声中学校

二年 齊藤 杏菜……………20

日本放送協会横浜放送局長賞

ある夫婦が教えてくれたこと

川崎市立南加瀬中学校

三年 中嶋 瑞美……………23

テレビ神奈川社長賞

経験から福祉を考える

川崎市立南菅中学校

三年 石川 達也……………27

神奈川新聞社長賞

差別の無い目で

平塚市立浜岳中学校

一年 竹内 綾……………30

ふれあい賞

「イチ」から広がる大きな力

大井町立湘光中学校

一年 香川

唯……………33

神奈川県共同募金会長賞

ジャンケンおばあちゃん

鎌倉市立岩瀬中学校

二年 神吉

奏……………36

神奈川県社会福祉協議会長賞

十七時四十四分のバス

葉山町立葉山中学校

三年 行谷

匡史……………39

準優秀賞・佳作入選者名簿……………

43

小学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

凱力かいりは凱力

相模原市立中野小学校

五年 坂本凱力

「ふくし」ってなんだ。ぼくがほちようきをつけていることが、「ふくし」っていうのかな。こまっている人を助けることが「ふくし」っていうのかな。ぼくは、ほちようきをつけているけれど、こまっていないから「ふくし」じゃないのかな。いろいろ考えたらよくわからなくなつた。

ぼくは、保育園の時からみんなの音や声がよく聞こえるようにほちようきをつけている。生まれた時からずっと同じだから、音や声が聞こえづらくても平気なんだけれど、みんなの話をなん回も聞き直したり、みんなの話がちがうふうに聞こえたりする時がある。お兄ちゃ

んやお姉ちゃんは、なん回もぼくが聞くとめんどくさそうな顔をして、もう話をしなくなる。なんでだろう。ぼくは、仲良く話したいのになって思う。

学校の「聞こえとことばの教室」は、とても好き。今は、長谷川先生と学習している。先生は、ぼくがやっているバスケのことを知っているし、いいことをいっぱい教えてくれる。ぼくの耳が悪いことを知っている人は、話しかけると、口を大きく開けて話しかけてくれる。だけれど、先生はあまり大きく開けない。でも、言っていることはよくわかる。なんでだろう。国語辞典で調べることが好きだから「ふくし」って調べてみた。「幸福。特に、多くの人々に同じように与えられるべき幸福」。むずかしいことが書いてある。「幸福」ってなんだ。これも調べてみた。「心配や不安がなくて満ち足りている様子」。「ふくし」はみんなが幸せなことなんだ。

ぼくは、ほちようきをつけてて耳が悪いけれど、幸せだと思っている。なんで凱力だけほちようきをつけなきゃいけないんだって思う時はあるけれど、耳が悪くても死にたいって思う時なんてない。バスケもうまくなれるように頑張れる。友だちとも遊べる。毎日とても楽しい。みんなが病気をしないで元気なことが幸せなんじゃなくて、病気で、痛いところがあっても元気に笑って生きられることが幸せっていうんだなっと思った。

ほちようきをつけるのはかっこ悪いって思っていた。この前、バスケの強いみんながぼうずだったのを見て、かっこいいと思って、ぼうずにした。ほちようきが目立つようになったけれどもう気にしないよ。ほちようきをしていても、耳が悪くても凱力は凱力だからね。

優秀賞

神奈川県教育長賞

ぼくの弟と家族

小田原市立千代小学校

三年 朝倉

稜

ぼくの弟は、児童発達支援センターというところに通っています。

弟は五さいですが、まだ話せません。一人でトイレにも行けないし、なんでも口に入れてしまいます。こだわりが強く、大声を出したり、パニックをおこすことがよくあります。

だから、ぼくやお父さんやお母さんは、外出しているときや、人がたくさん集まる場所で、弟の困った行動につかれてしまうときがあります。

でも、弟は、うそをつきません。え顔もとてもかわいいです。きちょうめんなどころもあります。意外に人の話もよく聞いているし、ぼくがピアノをひくと、とてもよろこんでくれます。

毎日たいへんだけれど、弟がいて良かったなと思います。

だけれど、時々、弟に急に大声を出されたり、たたかれたりします。そうすると、ぼくはイライラしてたたきかえしたり、おこったりします。何でもすると、お母さんにしかられてさらにイライラしたり、かなしくなったりします。毎日いっしょにいる家族でも、まだまだ弟のことがわからないことがたくさんあります。もつと弟の気持ちがわかればいいのになと思います。気持ちがわかれば、イライラしたり、いじわるをすることがへるかもしれないとぼくは思います。弟のことを考えたり、思ったりして、弟がよろこぶようなことをすると、弟もよろこんでくれます。

だから、周りの人や地いきの人などたくさんの人に、弟や弟のような子供や、大人の人たちや、その家族のことを知ってもらって、少しでも思ってくれとうれしいです。

時々、ぼくたちのような家族や、弟のような人が困っている所を見かけたら、ちょっとだけお手伝いしてもらえれば、とてもたすかります。そういうことが今よりふえると、とてもうれしいです。

優 秀 賞

日本放送協会横浜放送局長賞

私を忘れた大ばあちゃん

大磯町立国府小学校

四年 二宮 珠 生

「だれだっけ？」大ばあちゃんは私の名前をついに忘れてしまいました。それでもニコニコしている大おばあちゃんが大好きです。

大ばあちゃんは九十六さいです。歩行きでやつと自分の周りを2メートルくらい歩いていきます。ごはんのとき以外は、自分の部屋でテレビを見たり、ねていたりしています。

そして、いつも手助けが必要になった自分を「やっかいものだね」とか「迷惑ばかりかけてるね」と言っていました。そんな大ばあちゃんは悲しそうな顔をしていました。外に出ることもあまりしなくなりました。トイレが間に合わなくなることを心配して出かけなくなつたのです。

みんなで大ばあちゃんをお花見につれ出した時のことです。車椅子に乗せられた大ばあち

やんが良かったです。

「わたしは、みんなのお荷物さんだね。」と。

私はおこりたい気持ちになりました。どうして自分をお荷物だなんて思うのだろうと。そして、自分を悪者のように思っていることがかわいそうで、これから毎日そうやって悲しんでいくのかなととても心配になりました。年をとればみんな同じようになるのに。

大ばあちゃんは、少しずつ歩けるきりが短くなっていきました。トイレもせん用のものがベッドのとなりに用意されました。だんだんねている時間も長くなりました。体の変化だけではなく、何回も同じことを話したり、聞いたりするようになりました。

そして、とうとう大ばあちゃんは、私のことを忘れてしまいました。でも、私を見てうれしそうにニコニコ笑って一緒にプリンを食べてくれます。

年をとると、だんだんと物事を忘れていくのだとお父さんから聞きました。大ばあちゃんは、体が動かなくなっていくこわさも、これからどうしようという不安も少しずつ忘れていくのだと思います。「私はやかいかいものだね」という言葉も、今はあまり言わなくなりました。年をとって忘れることは悪いことではないと、私は思うようになりました。

大ばあちゃんが幸せそうにプリンを食べているのを見て、私は「名前を忘れられてもいいや」と思いました。百さいまであと少し。色々なことは忘れても、笑顔だけは忘れないでいてほしいです。

優 秀 賞

テレビ神奈川社長賞

安心・幸福

清泉小学校

五年 石 本 和

私はこの夏、一緒に住んでいた曾祖母の介護をし、最期を家でみとりました。

いつも私に色々な事を教えてくれていた曾祖母は、去年の夏に病院で「末期の胃がん」と診断されました。その時には、しゅようがじゃまをして、食べ物を胃から腸へ通す事ができなくなっていたので「胃ろう」という装置をおなかにつけて退院しました。しかし、半年たったころ胃ろうのチューブがつまって栄養を通すことができなくなり、また入院し、今度は、中心静脈という点滴をつかうことで退院しました。

家での生活は、主に私の母が曾祖母の介護をしましたが、私もおむつの交換や体ふき、飲み物をいれたりしました。

おむつ交換は汚いのはじめはやりたくないなと思いましたが、大好きな曾祖母だし、「も

し自分だったらよくれたおむつはいやだな」と思うと自然とがまんできました。

私たち家族は、曾祖母の介護に、訪問のお医者さん、看護師さん、ケアマネージャーさんにもお世話になり、その中で「社会福祉」という言葉を知りました。「福祉」は聞いた事があったけれど、意味を知らなかったので調べると、「神様が守ってくれている元で安心して暮らす」「安心・幸福」を表す言葉という事がわかりました。

私には今でも忘れられない事があります。それは、顔をふくタオルをわたす時に、まちがえておしりをふくタオルをわたしてしまった事です。曾祖母は気が付かないでそのタオルで顔をふいてしまいました。今でも思い出すと悲しくなります。この事を母に話したら、

「私もおばあちゃんにもっとできる事があつたんじゃないかと後かいするけれど、おばあちゃんは亡くなる少し前に、『おばあちゃん安心、みんなも安心』って言っていたから、きつと、これでよかつたんだと思うよ」と話してくれました。それを聞いて「安心」してもらえていたならよかつたと思えました。また、最期の日、曾祖母のお医者さん、看護師さんが私達と一緒に泣いてくれた事で、曾祖母は皆から愛されていて幸福だったと思えました。

曾祖母から最後に教えてもらった「福祉」の意味と、「人を幸福にする事で自分も幸福になれる」という事を忘れないで、社会のお手伝いをしていきたいです。

優 秀 賞

神奈川新聞社長賞

白いつえは命のつえ

清泉小学校

五年 鈴木那奈

夏休みのある日、近所の横断歩道で白いつえを持った人が止まっていました。私は、
（あの人、目が見えないんだなあ。）と思いました。なかなか歩き出しそうにないのでお母
さんが、

「お手伝いしましょうか。」と言うと、その人は、

「ご親切にありがとうございます。」と答えて、横断歩道を一緒にわたりました。

「白いつえはね、目の不自由な人が歩行する時に使う大切な命のつえだよ。」と、お母さん
が教えてくれました。そして、

「この点字ブロックの意味、分かる？」と、お母さんが聞きました。

「たぶん、線が進めで、丸いのは止まれだと思うけど。」と答えました。

私の思ったとおりでした。こうして見ると、歩道は点字ブロックがずっと続いていきます。駅周辺ではバスを降りる所から電車の切符を買う所、そして電車に乗る所までずっと点字ブロックあるのに改めておどろきました。また、切符の自動販売機には点字もありました。

お母さんが、

「目が見えない人の気持ちになって行動できるように、目を閉じて切符を買ってみよう。」と言いました。これは「ブラインドウォーク」と言うそうです。

目を閉じると、何も見えなくてこわく感じました。点字ブロックの線や点も、目が見えた時ははつきりわかったのに、目を閉じてみると自信がなくなります。

私は、これまで当たり前の事だと思っていた事もふだんふつうにやっていた事も、目が見えない人の立場になってみると、本当に大変なのだと分かりました。

目が不自由で白いつえをたよりに生活している人はたくさんいます。点字ブロックがあれば大丈夫という事ではありません。

私は、私たち一人ひとりの周りの人を思う気持ちですが、目の不自由な人の支えとなるのだと気がつきました。

白いつえは命のつえ。白いつえは目の不自由な人の歩行を守る大切な命のつえ。

私は、こまっっている人がいたら、これからは勇気を出して声をかけてみようと思います。

優秀賞

ふれあい賞

おじいちゃんと青いトマト

松田町立松田小学校

六年 渡 辺 菜瑠真

「今日も青いトマトばっかりだね。」と、お兄ちゃんは、ぼそっとつぶやきました。

「でも、おじいちゃんがとってきちやうだからしょうがないよ。」私は小さい声で言いました。

私のおじいちゃんは、三年前に脳の病気でたおれてから左半身まひと認知症になり、一年間入院しました。歩けなくなつたのもっと入院しなくてはいけないのに、おじいちゃんは自分の家に帰りがたがって泣くので、お母さんが仕事をやめて家で介護する事になりました。リハビリのおかげで、今ではデイサービスに通つたり、畑仕事を少しづつしたりしています。でも、認知症の症状はどんどん進んでしまい、いろいろな物を失くしたり、食事をした事を忘れたりします。ときには自分がどこにいるか分からなくなります。

畑の野菜もいつも熟す前にとつてきてしまいます。夏になってからは、毎日のようにおじいちゃんのとつてきた青いトマトが家にあります。

ある日、私も畑にトマトをとりに行きました。真っ赤なトマトは重くて下の方にたくさんありました。かがんで手をおくまで伸ばしてとりました。トマトをとりながら私は気づきました。手足がまひしているおじいちゃんは、下の方のトマトはとでもとりにくいだろうな、だから上の方になっている青いトマトばかりとつてきてしまうんだなと思いました。

今のおじいちゃんは、左半身が不自由だから体のバランスがとれません。でも、何もしないのではなく、自分ができるはんいの事を一生懸命やっているんだなと思いました。おかしな事ばかりするなと考えるのではなく、おじいちゃんを理解しておじいちゃんの事を助けて支えてあげる事が、とても大切だと思うようになりました。

おじいちゃんのできない事は、家族で助けてあげて、おじいちゃんに楽しい思い出をたくさんつくってあげたいです。これからも、おじいちゃんが大好きな農作業をずっと続けてほしいと思います。

優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

前を向いて生きる

秦野市立南が丘小学校

四年 石井李咲

その日は私は楽しみにしていました。どうやって喜ばせるか、サプライズを用意していたからです。喜んでくれる姿を想像して、ワクワクして当日をむかえたのでした。その日とは、社会福祉協議会が計画して下さいった「福祉プログラム」という企画です。公民館に何人もの身体の不自由な方々が集まりました。

なぜこのような状態になったのか、現在はどのような生活を送っているか等、淡々と語って下さいました。その姿に実は驚きました。なぜなら、悲しんだり、やけになったりしている様子が少しもないからです。なぜ私がこんな不自由な目に、不便な目にあわねばならないのだ…と訴える人は誰一人いませんでした。きっと、最初は思ったに違いありません。でも、そんな気持ちをごどこか遠い所に置いてきたかのように、さすががしさえ感じるので。過

去を変えることはできない、では今できる事をがんばってみようじゃないかと言葉に表さなくても、前向きな気持ちであることがひしひしと伝わってくるのです。

これからの私達の人生は長いです。いやな事も、難しい問題も出てくるでしょう。そんな時、ただ泣きわめればよいのでしょうか。そうすれば、すぐに仲間がやってきて助けてくれるのでしょうか。そうではなく、もやもやした自分の気持ちを整理して、自分なりの考えを持って前を向いて生きていく：そんな風に教えてもらった気がしました。たとえ身体が不自由でなくても、気持ちは同じです。難題にしりごみするのではなく、立ち向かうのです。そんな勇気を逆にもらいました。

私達のサプライズの手品は大成功だったのですが、ただの白い紙にでこぼこした点の集まり（点字）を人差し指一本でスラスラと読む男性からは、反対に手品を見せてもらったようでした。まるで魔法でした。

たくさんの私達の前で、自分の姿を見せて自分の事をお話し下さった事は本当は本当はつらいと思います。私達の将来を思ってくれたからこそ、集まって下さったのだなと分かりました。

今まで接する機会はありませんでした。でもその日から、この場所で一緒に生きていく事を強く意識し始めました。

優 秀 賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

ボランティア体験

厚木市立毛利台小学校

六年 継 新 命

夏休み前の総合の授業で、愛名やまゆり園の方が、福祉や障害についてのお話をしてくださいました。僕は五年生の時、福祉委員会でやまゆり園にかざる壁画を作って届ける活動を通して、やまゆり園の事は少し知っていましたが、今回お話をうかがってとても興味がわきました。そして僕は、夏休みにやまゆり園のボランティア体験に参加することに決めました。やまゆり園には、若い人から高齢者まで、いろいろな障害を持った方々がいました。日中活動では、その方々とパンピカや毛糸モップ、花火の筒のふたを作る作業を体験しました。手先に障害があつてうまく動かせなかつたり、作業がなかなか進まない方もいましたが、みんな一つひとつついていねいに一生けん命に取り組んでいてすごいなと思いました。

僕は、障害者の方ができない事かわりにやっつてあげたくてすぐに手を出したり、自分も

同じものを一緒に作りたくて、自分の作業に夢中になってしまいました。その時、施設の方に、なんでもやってあげることや、同じものを一緒に作る人が支援する人の役割ではないことや、できない事をできるようにしてあげるにはどうしたらいいのか考えて手助けをすることが大切だと教わりました。そして、りょうに住んでいる方々の食事も見学しました。上手に飲みこめない方、噛めない方には、その方の障害の程度に合わせて細かくきざんであったり、ペースト状にされている食事がだされていました。やまゆり園は、そこに住んでいる方一人ひとりが食べやすいように、よく考えて作っているんだなと思いました。

ボランティア体験をするまで、僕は障害のある方が上手にできないことを自分がかわりにやってあげて、少しでも楽にしてあげたいし、そうしてあげることが福祉だと思っていました。しかし、日中活動や食事の見学を通して、それは少しちがうとわかりました。

障害を持った方々が、自分でできる事が増えて、一人ひとりがくらしやすくなるように手助けしたり、工夫することが福祉ではないかなと感じました。

この体験で障害者の方と仲よくなり、今までよりも身近に感じられるようになりました。そして、福祉についてもっと調べてみたいです。

中学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

正しく理解し、伝えていくこと

聖和学院中学校

一年 川上乃愛

私の小学校には「学習ルーム」という名前の個別支援学級がありました。そこにはダウン症の子や自閉症の子など知的障がいのある子が通っていました。私は時々休み時間になると、遊びに行くことがありました。ジェンガをしたり、トランプをしたり、そこで過ごす時間は楽しかったです。

ところが、そんな私に友達が、思いがけない言葉をかけることがありました。

「あの子たちって、なんか変だよね。」

「なんで、あの子たちと仲良くするの?」

と、言ってくる子が数人いました。中には、

「そんな子たちと仲良くしていると、乃愛も変になっちゃうよ。」

と、言う子までいました。とてもショックを受けました。私は、

「そんな訳ないよ！」

と言いながら、厳しい言葉をぶつけてきた友達に、そんな気持ちでいてもらいたくないなという思いでいっぱいになりました。しかし、私には上手に友達を説得する力がありませんでした。

私が学習ルームの子たちと自然に接することができたのは、きつと父が特別支援学校の先生をしているからだと思います。父に特別支援学校に通う子どもたちについて聞いたとき、

「明るく個性豊かだ。」

と、嬉しそうに話してくれました。それから、

「上手くできないことが沢山あるけれど、一生懸命頑張っていることに変わりはない。」
ということも教えてくれました。

何年前かに、父の講演会に参加する機会がありました。その時に、父は、特別支援教育について、このように話していたことを覚えています。

「特別支援教育は、子どもの価値を高める教育です。できの悪い子とか、ダメな子という意識を持たないでください。」

もし父が特別支援学校の先生でなかったら、私は今と同じように考えることができたかな

と思います。もしかしたら、無理解のために、私が学習ルームに在籍している子と仲良くしている人を見て、「どうして……？」と尋ねていたかもしれません。

私は、幼い頃から、父の学校の文化祭やお祭りなどに参加して、肢体不自由の方や知的障がいの方と交流する機会が沢山ありました。幼い私のためにプラ板でネームプレートを作ってくれたり、私の名前の入ったエコバッグをプレゼントしてくれたり、とても可愛がってもらった、と母が話してくれました。

そのような中で成長してきた私は、車いすに乗っている方、白杖を持った方、手話で話す方などに、今まで一度も偏見や差別的意識を持ったことはありません。とても当たり前で自然なことだったからです。

父は言います。

「お父さんも目が悪いから眼鏡をかけるでしょう？それと同じだよ。眼鏡をかけている人に偏見を抱かないよね。車いすの人にも、すべての人が同じ気持ちを持つべきだよね。」と。

大切なことは身近な大人が正しい理解を持ち、教えていくことだと思います。私が大人になったら、父から教えてもらったことを、自分の子どもたちの世代に伝えていかなければなりません。差別や偏見のない世の中にしていく責任が私たちにはあると思います。

正しく理解し、伝えること。

それが私の考える「福祉」です。

優 秀 賞

神奈川県教育長賞

妹への感謝の気持ち

三浦市立初声中学校

二年 齊 藤 杏 菜

私の妹の「障害」は、目で見て確認することはできません。三年前の脳腫瘍の手術による後遺症と合併症による「障害」です。妹は五歳のときに脳腫瘍と診断されました。私はがんイコール死というイメージが強かったため、正直、妹が脳腫瘍と診断されたときすごくショックを感じました。

現在私の妹は小学二年生です。「障害」を抱えながら小学校の特別支援級に通っています。妹が抱えている「障害」は脳腫瘍の手術によるもので、視野が狭くなったこと、視力が低下したことで、代謝が悪くなったこと、嗅覚が失われてしまったことです。さらに、尿崩症という尿に司令を出すホルモンがうまく分泌されない合併症とも日々闘っています。

「障害」というハンデがあっても私の妹は力強く、一步一步たくさんのことにチャレンジし

ています。

一つ目は勉強です。普通の小学二年生に比べると、まだ一年生の内容が理解できていない部分もあります。それでも妹は家族や小学校の先生に支えられながら毎日宿題をしたり、授業を受けています。妹の最後まで諦めずに頑張っている姿は、私も尊敬しています。そして勇気をもらいます。小学校は妹の目に見えない「障害」をしつかり理解して、妹にとって安全で過ごしやすい環境をつくってくれています。しかしこのような対応をしてくれる学校ばかりではありません。「障害」を抱えている子供達は全国に大勢います。その「障害」を抱えた子供達のことを理解し、「障害」を抱える子供にあつた対応と支援を平等に行っていく必要があると思います。対応と支援を確立していくことで、「障害」を抱えている子供達も普通の子供達と同じような生活に一步近づけると私は思います。

二つ目は運動です。妹は病気を発症する前から体を動かすことが好きでした。しかし小学校の体育の授業を見学しなければならないことがあります。それはマットや跳び箱といった運動で頭を強く打つ危険性があるからです。妹はやりたいのにできないという大きなストレスを感じているはずです。それでも休み時間には小学校の先生に力を借りて、縄跳びやボール運動を自分のペースで行っています。

妹が「障害」というハンデを持ちながら生活しているのにも関わらず、世の中には「障害」を馬鹿にする人も多くいます。今小中学生の間では「ガイジ」という言葉が使われています。「ガイジ」というのは障害児を略したものです。小中学生は「ガイジ」という言葉をやんちゃな

子やふざけている子に使っています。本当に「障害」を抱えている人にむかって使っているわけではないので、軽い気持ちで使っている人がほとんどです。

それでも「障害」を抱えている人は傷つくと思います。好きで「障害」を抱えているわけではないのに「障害」を馬鹿にされていい気分はしなれないと思います。また小中学生も「障害」を抱えている人に言っではいけないと思っっているから「障害」を抱えている人には言わないのだと思います。心の中ではわかっけていてもきつとどこかで「障害」を抱えている人を馬鹿にしているのだと思います。私は「障害」を抱えている人が馬鹿にされている事実を知った時残念に思いました。

人は健康に毎日が送れることが一番の幸せです。でもこの幸せを世界中全ての人が味わうことはできません。だからこそ健康な人は「障害」を抱えている人が世の中にいることを頭に入れ、日々の生活に感謝するべきだと私は思います。私は「障害」を抱えている人と健康な人が今よりもっと助け合って暮らし、同じ立場で生活できる社会を心から望んでいます。私はこの気持ちに気づかせてくれた妹に感謝の気持ちでいっぱいです。私の妹は世界一努力をして今を誰よりも大切に生きています。そんな妹は私のとても大切な宝物です。

優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

ある夫婦が教えてくれたこと

川崎市立南加瀬中学校

三年 中嶋 瑞美

私は修学旅行先の京都でとても貴重な体験をした。それは同じ行動班のクラスメイトと案内役のタクシードライバーの方と歩いているときだった。四条、三条のあたりを見てまわっていると、ご夫婦らしき二人組に声をかけられた。

「三条京阪駅はどちらですか？」

と聞かれたので、あたりを見まわすと、ちょうど地下鉄の三条京阪駅の入り口がすぐそばに見えた。

「あつちですよ。」

すぐに答えてから、私はある事実が気がついた。そのご夫婦は二人とも白い杖をついていたのだ。駅までは五メートルとない距離だったが、よく見えないようだった。それでは私の

答えなど全く役に立たない。どうすれば、うまく案内できるかわからなくなった。すると、ある考えが浮かんだ。

「手をつなぎましようか？」

と聞くと、

「あら、じゃあ手よりも、肩につかまっても良いかしら？」

そうして私はそのご夫婦の道案内をすることができた。三条京阪駅につながる階段までの五メートルは短いようでも長く感じられた。

「私たちは修学旅行生なんです。」

「まあ、そうだったの。全然土地勘の無い人に聞いちゃったのね、ごめんなさいね。そうだ、どちらから来たのかしら？」

「神奈川からです。」

なんてたわいもない会話をしながら、だんだん五メートルの距離が縮まっていく。そんな時ご婦人が私の瞳をのぞきこんで言った。

「私も前は見えていたの。場所もわかっているのにね。でも最近全然見えないわ。」

そして地下への階段の前に着くとご夫婦は私たちに礼を言って階段を下りていった。

この経験をするまで私は障害のある方を少し怖く感じていた。明確な理由はないわけではないが、それさえも私の先入観とトラウマが大部分を占めていた。そのため障害のある方には近寄りがたく、積極的な交流は避けていた。今思えばそれは差別的意識以外の何ものでも

ない。明らかな「バリア」だ。バリアフリー、ノーマライゼーションがテレビや新聞でうたわれているというのに、それらの情報媒体をずっと見てきたというのに、私の意識はちっとも変わっていないかった。その事実を突きつけられ、ショックを隠せなかった。

お礼を言われ、自分は良いことをしたなあと思ってもおかしくないはずなのに心は沈んでいく。あのご夫婦は私に認識の間違いを教えてくれたのだ。そしてそんな意識がこの社会に少なからずあるのだろうと気づかせてくれた。それらがこの社会全体の雰囲気を作り出しているのだろう。本当の意味でのバリアフリーやノーマライゼーションを創りあげるには個人の意識を変えていくことから始めなければならない。

そのためにはお互いのことを知る必要がある。私も含め健常者は障害者のことを知らなすぎると思う。一部の人を除いてみんな知識が少ないから、だから先入観で判断してしまう。お互いを知ろうと努力することでその過程に新たな発見もきつとある。そうやってお互いの距離を縮めていくことが大切だ。

あの五メートルは健常者と障害者との距離だったのかもしれない。健常者と障害者の間には本来距離はないはずだ。見た目の違い、雰囲気の違い、それらを個性とおおらかに受け止められる社会になればいいと私は思っている。

一組のご夫婦との出会いが私の認識を変え、もっと障害者について学ばなければならぬと思うきっかけを与えてくれた。今は遠いと感じてしまうこの距離を、お互いのことを知ろうとする努力によって縮めていきたい。一人ひとりが自分の意識を変えていくことで、やが

ては社会全体が変わり本当のバリアフリーを実現できるだろう。



優 秀 賞

テレビ神奈川社長賞

経験から福祉を考える

川崎市立南菅中学校

三年 石川 達也

久しぶりに物置に行った時、奥の隅にあった多くの「右足用の装具」を見つけた。三年ぶりだった。すっかり忘れていたけれど、昔の知り合いにあったみたいな懐かしい感じがした。小学一年から四年くらいまで股関節の病気で右足に装具をつけて生活をしてきた。だからこの装具は何年もほくの体の一部だった。

「二度も装具を着けることを嫌がらなかったことはとても意外だった。」と親から言われた事がある。重くロボットのようには歩かなければならなかったもので、いつか「もう着けるのは嫌だ。」と言われるんじゃないかと思っていたらしい。

自分でもそんなに嫌ではなかったのが不思議だと思う。着けなければ歩いてはいけなかった。自分で仕方なく着けていたのかも知れないが、その頃は着けるのが当たり前だと思っていた。

今改めて考えると、装着することでは「よろい」を着ている気持ちになっていたような気がする。足だけじゃなく気持ちも守られてるようで心強くしてくれていた。だからなのか人に右足を見られることをあまり気にしていなかったと思う。

以前テレビで、装具を作る「義肢装具士」が紹介されていたので見るように勧められた。この時、職業の名前を初めて知った。

一つの装具や義肢を作るのに細かい部分にまですごくこだわって何度も作り直している所や、着ける人に対して真剣に向き合って仕事をする姿勢に驚いた。一つの装具がこんなに考え、時間をかけて真剣に作られたものなんだと知った。

ぼくの使っていた装具もすごく考えられているのに気がついた。例えば装具にどんなアクシデントが起きてても一部分を交換するだけで、修理が一時間だけで終わってしまった。鉄の棒がすり減ったり、曲がったり、何が起きててもすぐに対応できるように考えられていたのだと思う。そして装具を作った製作所へ持つて行くと、忙しそうな時でも年中無休ですぐに直してくれた。ぼくの病気はいろいろな人に支えられていたんだと改めて感じた。

「義肢はモノではない、その人の一部になるものだ。」と言っていたところが印象的だった。ぼくが装具に対して感じていることと同じだったので驚いた。この装具も作ってくれた人の意志が形になってぼくに伝わって、体を支えていたんだと思う。

今、健康になって思うのは足が不自由な時でも周りの人達が出来ないことを見つけないのではなく、これから何ができるかを考えてくれたことが支えになっていったと思う。装具を着け

るのを嫌がらなかったのはいつも周りの人がほくに出てくることを考えて、いろいろな可能性を見つけてくれたからだと思つた。だから小さなことでも少しは前に進んでいる実感があつたのだと思つた。一つずつ可能性を見つけて、希望や目標を持つ事が一番必要だと思つた。

今、病氣はほとんど治つてゐる。きれいな形の骨が小学生の間にできなければほくは一生運動ができなかつたことを聞いて、初めて病氣の重大さを実感した。

中学生になり、三年間夢中で部活をすることができた。七年前のほくには信じられないことだ。

小学生のときは装具なしに歩いたり、普通に走るのはどういう感覚か想像もできなかつた。今歩いて通学したり、なんでも出来るようになった。しかし病院でいろいろな障害や病氣を持った人と会つて、自由に歩けることが当たり前ではない人が多くいるのを知つた。

先日、重い荷物を持つた足の悪い人を見かけた。ほくはとても氣になつていたのに、声をかけることができずとても後悔した。この病氣の経験があつたからこそ、ほくには分かることや氣がつくことがあるのに。勇氣を出して声をかけられなかつたことに後悔をした。病氣の時に支えてもらつた分、今度はほくがやる番だと思つた。自分だけにしかないこの経験を無駄にしないようにしたいと思つた。

そして当たり前前に生活をしてゐることにもつと感謝しなければいけないと思つた。

優 秀 賞

神奈川新聞社長賞

差別の無い目で

平塚市立浜岳中学校

一年 竹 内

綾

私は以前、小学生の時に知的障害の子が隣の席になったことがありました。その子はただ障害があるだけで、みんなから避けられたりしていました。私には何故その子が嫌われるのかが分かりませんでした。

そもそも人は少しでも変わっている人がいるとジロジロ見たり、「見てはいけない」などと普通の人間とは違う見方をしてしまうことが少しはありますよね。正直、私も思ってしまったことはありました。何故そのように思ってしまうのでしょうか。その人達も私達と同じ人間なのです。そのように思うのが「普通」と考える人もいるでしょう。でもそれは「普通」ではいけないことなのです。ではそれを「普通」と解釈しないためにはどうすればいいのか考えました。

前に私は男の子達が障害のある子に「キモイ」などの言葉を面と向かって言っているのを見ました。その子に私は「何でキモイと思うの？」と聞きました。するとその子は「こいつおかしいし、キモイと思うのが普通だろ。」と答えました。私はそれがその子の「普通」になつてしまつてることがとても悲しかったです。少し普通の人と違っているからキモイ、という考えはおかしいと思います。これを「普通」だと言う人の方が私はおかしいと思います。それは何も抵抗のできないのを良いことに弱い者いじめをしているのと同じことです。

私は前に障害のある子が集まるクラスに掃除に行つた時、私とその子達に声をかけながら一緒に掃除をしているとそのクラスの先生にお礼を言われました。

「障害のある子は何かと避けられたり、きつく当たられたりするから、優しくしてもらつてうれしいわ。ありがとう。」

と、少し悲しそうに言われました。それを聞いて心が痛くなりました。現にその時自分もまともに掃除をしていないのに、少しふざけていた年下の障害のある男の子に「最低」「ウザイ」などの言葉を言っている人がいました。障害のある子だつて心が無いわけではありません。当然そんなことを言われたら傷つくに決まっています。もしも言われたのが私だったら、あんなに毎日言われていたら、泣いてしまふと思います。それでもまったく泣かずに堪えている子達はとても強い心を持つていると思います。

でも、全員がそのようなことを言う人ではありません。例えばその先生のような人です。先生はみんなに酷いことを言われている本人のように悲しそうでした。そして言われた本人

のことをとても心配していました。

しかし心配と同情とは違います。ただ単に「かわいそう」などと言うのは無責任です。私は「かわいそう」と言われるのが一番嫌いです。私はどんな時でも決して自分のことをかわいそうだとは思いません。それは自分なりに精一杯努力をしているからです。自分が努力していることをかわいそうだと言われるのはとてもつらいです。私は母子家庭です。でもそのことについて自分がかわいそうだと思つたことはありません。「かわいそう」と言われるとても悲しくなります。だから「かわいそう」ということは相手のことを何も知らずに傷つけてしまう、とても無責任な発言になることもあると私は思います。

私はみんなが先生のような人になって欲しいと思います。でも私もまだ特別な目で見てしまっていることがあります。だから私もみんなも、障害のある方達のことを差別したりジロジロと変な目で見たりすることをやめるように心がけて欲しいです。もし自分がそのようなことをされたらと、考えてください。障害があつてもみんなと同じように心はあります。私は障害のある人もない人も嫌な思いをしないように、心無い言葉を使わない社会になって欲しいと思います。私も今までのことを思い出して他の人を傷つけたりしないように接していきたいなと思います。

優 秀 賞

ふれあい賞

「イチ」から広がる大きな力

大井町立湘光中学校

一年 香川

唯

先日母と買い物に行った時のことです。レジで黄色い募金箱が目飛び込んできました。その募金箱は毎年夏に放送されているチャリティー番組のものでした。私はその時にお金を持っていなかったので募金をすることはできませんでした。しかし数年前にたった一円を募金箱に入れたことを思い出しました。その時の私は「たった一円の募金では意味がないのではないか」と思っていました。その答えは番組を見てから分かりました。番組の最後に司会者が募金の結果を発表し、その時に集まった金額は約十億円もありました。司会者は、

「たくさんの方が少しずつでも募金をすれば大きな結果が出る。」

と言っていました。もし私のように「たった一円だから」と言って募金をしなかったら、またそういう人が増えてしまったら、集まる金額が減ってしまうでしょう。集まった金額の

量だけが募金の全てではないと思いますが、集まらないことには次に進めません。

「次に進む」とは、集めたお金で困っている人を助ける、少しでも幸せにすることです。チャリティ募金の使い方を調べてみると、福祉車両の贈呈や障害者情報保障支援、難病患者支援、身体障害者補助犬支援などを行っていました。その中でも私が一番興味を持ったのは『障害者スポーツ支援』です。ここには支援の一環としてスポーツ用義足を贈呈したことが載っていました。私は小さい頃から走ることが大好きです。小学生の時から大会に出場し、今は陸上部で記録短縮のためにがんばっています。しかし足に障害がある方は走りたくても私のように走ることはできません。そして義足の贈呈があっても運動ができない人もいます。私が調べた記事には「次回はスポーツ用車いすも贈呈したい」と載っていました。そのため一人でも多くの人が一円でも募金することが大切だと思います。

身近な活動として、私の住んでいる町では、毎月二十三日を『福祉の日』と決めています。福祉の日には家にあるペットボトルのキャップやベルマークを学校の校門で回収しています。ペットボトルのキャップは約八百個で一人分のポリオワクチンを購入することができます。小学校時代に『エコキャップ800』という活動をしていました。八百個のキャップと聞くと途方もない数字のように思いましたが、全校児童八十人の小さな学校でも児童一人ひとりが少しずつ何回も提出することにより、一年間で約二万個のキャップを集めることができました。中学生になった現在でも二十三日の福祉の日には、キャップなどを持って行き活動を続けています。

私は一円の力、エコキャップ一個の重みを考え直しました。『ゼロ』ではなく『イチ』であることが重要で、そのことによって次に広がっていくのです。長崎で核兵器廃絶活動をしている高校生たちの合言葉は『ビリョクだけれどもリョクじゃない。』だそうです。この言葉は全ての活動に通じます。ただ自分だけがスポーツを楽しむのではなく、障害のある人、そうでない人、みんなが楽しく活動できる世界にしたい。スポーツに限らずみんなが楽しく生活できる世界にしたい。そのために大切なことは、たった一円でもいいから募金に協力すること、一個でも一枚でもいいから福祉の日にキャップやベルマークを持って行くことだと思います。必要なのは募金の金額や量ではなく、みんなが福祉について常に考えることです。そしてこのような活動が『チャリティー募金』といったイベントがなくても当たり前に行われるようになることです。テレビのイベントや福祉の日は、『福祉』について考え意識を高めることには有効です。しかし将来『毎日が福祉の日』のようになり、いい意味で『福祉の日』がなくなるような社会になることを希望します。

週末にはまたスーパーに買い物に行きます。その時はお財布を持って行ってきます。無理をしない範囲で募金をしていきたいと思えます。それはみんなにやさしい社会への私の第一歩です。

優 秀 賞

神奈川県共同募金会長賞

ジャンケンおばあちゃん

鎌倉市立岩瀬中学校

二年 神 吉

奏

私のおばあちゃんは、耳が聞こえません。おばあちゃんの耳が聞こえなくなったのは五年くらい前からです。私がおばあちゃんを呼んでもなかなか気づいてくれなかったり、質問したことの返事がちぐはぐでおかしかったりしました。最初の頃は「歳ね」なんて言っていて、笑って過ごしていましたが、そのうちおばあちゃんの耳は完全に聞こえなくなりました。

私がおばあちゃんに会えるのは年に数回しかありません。私が帰省した時、おばあちゃんが必要することがあります。それは「ジャンケン」です。小学生の頃からよくジャンケンをしていましたが、私が中学生になった今も私の顔を見ると「ジャンケンしよつか」と言っていて、何度もジャンケンに誘うのです。そして勝っても負けてもおばあちゃんはニコニコと笑って、楽しそうなのです。おばあちゃんのニコニコ顔を見ると私も嬉しいので、何回もジャンケン

をしてしまいます。

ある日私は母に「何でおばあちゃんは、あんなにジャンケンをしたがるのかな」と聞いたことがあります。すると母は「おばあちゃんにとってジャンケンはコミュニケーションなんじゃない。」と言いました。耳が不自由になったおばあちゃんは相手の言葉を理解するのがとても難しいことです。でもジャンケンなら耳が聞こえなくても相手と一緒に楽しむことができます。私はその話を聞いて「ジャンケン」がおばあちゃんと私の気持ちをつないでくれていたんだと思いました。そう理解してからは、おばあちゃんと私の気持ちをつないでくれてとても楽しくなりました。私とおばあちゃんがジャンケンをしていると隣でおじいちゃんが「また、やっとなるんか」と言って笑います。その様子を見て周りにいる父母や兄も笑うのです。でも誰よりも一番大声で笑っているのはおばあちゃんです。私が今まで生きてきた中で、こんなにジャンケンがおもしろいと思ったことはありません。そんなよく笑うおばあちゃんですが耳が不自由なことではいろいろな苦労があるはずですよ。

私に何かできることはないかと思ひ、ある時、おばあちゃんを観察していました。するとおじいちゃんが「おばあちゃんに、「しょうゆとって」と言いました。でもおばあちゃんは聞こえません。「しょうゆ」と大声で言うと、おばあちゃんは「紙に書いて」と言いました。耳が聞こえない人にとつていくら大声で言われても、たった四文字の言葉でも聞こえないものは聞こえないのです。私はその時悲しい気持ちになりました。昔は聞こえていた声も音も今のおばあちゃんには全く聞こえないのです。

私はおばあちゃんにホワイトボードをプレゼントしました。そして短い言葉も全部そのホワイトボードに書いて伝えました。するとおばあちゃんの顔がパツと明るくなりました。文字を読んで嬉しそうに答えてくれるのです。私はこの時「ジャンケン」以外のコミュニケーションがとれたと実感しました。

私にとって「福祉」とは困っている人のことを考えることです。私のおばあちゃんは耳が聞こえないこと以外は健康です。周りから見れば「元氣そうなおばあちゃん」としか映らないでしょう。でも会話した時、おばあちゃんの耳が不自由なことを知ります。外見だけでは解らないこと、また顔が笑っていても心がつらいと感じている人はたくさんいると思います。私たちが最初に行えることは相手を思いやることです。そこから自分には何ができるのかを考え、困っている人が心から笑顔に安全に暮らせる世の中をつくっていくことが大切だと思います。

優 秀 賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

十七時四十四分のバス

葉山町立葉山中学校

三年 行 谷 匡 史

その日僕がバスに乗り込むと座席が二つ折り畳んであるのが目に入った。そこはちょうど車イスのマークがある席で、あの場所を利用する人がいるのだなんて考えたこともなかった。珍しさから僕はその場所がよく見える席へ座った。

一つ目の停留所を出発し、二つ目の停留所に彼はいた。見た目は普通のサラリーマンで普通のサラリーマンと違っていたのは、彼が車イスに乗っていることだった。帰宅途中に見た彼に僕は「きつと今日は車が使えない日なんだろうな」と思うだけだった。

また別の日、あの日と同じ「十七時四十四分」のバスに乗ると彼はいた。考えるに彼は日頃からこのバスを使っているらしい。車イスの人がバスに乗っているのすら見かけたことがないのに通勤に使っているだなんて。なぜ彼はそのような手段を選んだのだろうか。

その時、僕は初めてバスの車内が彼への好奇の目で満ちていることに気づいた。優先席に座っているおばあさんも赤ん坊を抱いた女性もこのバスに乗っている全員がこの珍しい客のことをチラチラと観察していた。無論僕もその中の一人だった。

バスを降り、家へと歩いている最中、いつもは気にならないものが目についた。スロープや車イスの人間の駐車場、低い位置にボタンがある自動販売機など。

確かにまだ世の中は段差だらけだし全ての自動販売機が低い位置にボタンがあるわけではない。でも社会は確実に車イスの人とそうでない人が共存できる形に変わってきている。

変わっていないのは受け入れる側の心だ。先程のバス車内でも僕達は車イスの彼を見せ物のように扱ったし、何よりもなぜバスを使っているのかと考えてしまった僕の考えに問題がある。彼はただ公共の乗り物を利用したに過ぎなかった。

「障害者」というレッテルを貼られた彼らは時に優遇され、時に除けものにされる。

彼らは社会に出れば必ず誰かの手を借りることになるだろう。それは僕達が手を差し伸べていけたらいいのだけれど、どうも上手くいかない。どのようにしたらいいか僕等には分からないのだ。分らないからこそ自分と同じ人間として平等に接することができないでいる。彼らは彼らで社会になるべく迷惑をかけないように考えているように見える。誰かの手を借りなければ移動だっけ思うようにできないことを彼らが一番よく知っている。迷惑をかけたくない、そんな思いが彼らの行動の幅を狭くしてしまっているのではないだろうか。

車イスの人々があまりにもひっそりと生活をしているから、僕がバスで見たあの人は珍しい

い存在となつてしまった。しかしそうあるべきではないのだ。ユニバーサルな世の中を目指し、実際そうなりつつあるのに、どうして誰かが社会に遠慮を続けているのだ。

車イスの人が手伝いを求めるのは当然のことだし、求められたら応じるべきだと思う。それがスムーズにできさえすればいいのだ。どうしたらいいか分からないと理由をつけ、腫物に触るようになってしまっている心、迷惑はかけたくないと行って社会に出ることを必要以上で遠慮してしまう心。どんなにバリアフリーなものが普及したとしても心のバリアーがある限り、ユニバーサルな世の中は達成されないだろう。

今日もまた「十七時四十四分」のバスに乗った。

「障害者のお客様がー。」

いつものアナウンスが聞こえ、車内の空気が変わったことを感じる。

運転手に車を押され、好奇の目を浴びながら申し訳なさそうにバスに乗り込む彼の背中を、僕はただ見つめることしかできなかった。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

準優秀賞

手あそびのときのおばあさん もえ	茅ヶ崎市立香川小学校	二年	佐野優彩
わたしの弟	相模原市立上溝小学校	四年	吉野日笑
ぼくにとつての福祉	厚木市立厚木第二小学校	四年	田中樅
大事な妹	寒川町立寒川小学校	四年	金子陽向
サポートいっぱい の街	小田原市立芦子小学校	五年	吉田百葉
幸福のかめ人形	横浜市立能見台小学校	六年	飯塚楓果
僕のお姉ちゃん	相模原市立川尻小学校	六年	輿水駿介
共に得た成功	平塚市立大野小学校	六年	平野真久
友達の少女は夢をくれた	伊勢原市立比々多小学校	六年	堀江真綺
	伊勢原市立石田小学校	六年	星崎ひかる

佳作

わたくしのおばあさま
かいごしせつでお手伝い
人とのつながり
ふくしのし事を体けんして
心からのゆずり合い
お兄ちゃんのおでかけ
デイズニールランドの様な世界
祖父の生き方
本当のやさしさ
わたしのお父さん

函嶺白百合学園小学校	二年	山田桃嘉
川崎市立富士見台小学校	三年	紺野快青
カリタス小学校	三年	峰島あや香
川崎市立東柿生小学校	三年	秋山夏鈴
座間市立相模が丘小学校	三年	佐野夏萌
寒川町立小谷小学校	四年	金子晃平
開成町立開成南小学校	五年	平野あかり
開成町立開成小学校	五年	竹内唯良子
相模原市立青野原小学校	六年	佐藤麻衣
大井町立大井小学校	六年	清水里香

中学生の部

準優秀賞

思いやりに気付いたとき	伊勢原市立中沢中学校	一年	榎本美香
幸せな超高齢社会を目指して	鎌倉市立大船中学校	二年	佐々木花蓮
助けてもらって感じたこと	秦野市立鶴巻中学校	二年	佐藤佑哉
耳の障害への未来	秦野市立鶴巻中学校	二年	渡辺啓心
スポーツを通じて	湯河原町立湯河原中学校	二年	水口紗季
寄りそうことの難しさ	平塚市立金旭中学校	三年	岩田まど香
障がいという壁	厚木市立荻野中学校	三年	新井佑里恵
わが家の介護士から学んだこと	寒川町立旭が丘中学校	三年	宮代真由
私と手話	大井町立湘光中学校	三年	日下未歩
介護を見つめて	湯河原町立湯河原中学校	三年	朝倉麻里亜

佳作

挨拶とコミュニケーション	相模原市立中沢中学校	一年	古澤
お年寄りと若者の関わりについて	相模原市立北相中学校	一年	遠藤
命の大切さ	茅ヶ崎市立円蔵中学校	一年	二野
安心してくらすために	伊勢原市立伊勢原中学校	一年	杉山
本当の福祉って何？	伊勢原市立中沢中学校	一年	輿石
お年寄りと私たち	伊勢原市立中沢中学校	一年	川崎
閉ざされたカーテンの中で	大井町立湘光中学校	二年	伊原
小さな優しさ	相模原市立大野北中学校	三年	後藤
対応を考えて	平塚市立浜岳中学校	三年	武田
元気を届けるリレー	開成町立文命中学校	三年	藤井

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 平成 26 年度版

平成 27 年 1 月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4 - 2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町 2 - 24 - 2
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社
表 紙 神奈川県立相原高等学校
1 年 石川 毬子

ともしび双書



再生紙を使用しています



ともしび運動

ともしび運動は、高齢者も若者も、障害のある人もない人も、国籍が違う人も、すべての人たちがお互いに理解し、ともに手を携えて歩むことができる「ともに生きる福祉社会づくり」をめざすかながわの県民運動です。

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会